

お別れ(一)

十一月二十三日、晩秋の寒い夜明け前、慌ただしい雰囲気で目が覚めた。居間の炬燵の周りに、父も祖父も祖母も、ジイジイまでも心配顔で集まっている。母は妹をしっかりと抱いて

「どうかネ、どうかネ」と、ほっぺを指でつつきながら話しかけている。

父が

「医者へ行こう、わしが背負うけえ、お前は早く着替えをして、隆恵の着替えとおむつを忘れるなよ、それから……」

と急がせている。祖母は提灯に灯りをつけて、土間で待っている。母が

「山越しかネ、大向に廻るのかネ」

と父に聞いている。祖父が

「遠廻りでも、道の良い方が早く医者に着けるけえの」と諭すように言う。

父は妹を背負い、母は小さな包みを胸に抱えるようにして、まだ暗い夜明け道を急いだ。鹿野まで二里半の道のりである。

妹は、寝る前には元気に乳を飲み熱もなかった。夜明けに目覚めておむつを取り替えようと見たら、ぐったりして元気がないのに驚いて、医者に行くことになったらしい。

富田から鹿野へバスは運行していたが、早朝に自動車は走らないし、今日のようにタクシートの走る時代でもない。父は自転車に乗ることは出来たが、病人を背負って自転車を走らせるのには、ためらいがあつて、歩くことに決めて出掛けて行ったようである。

「七時ごろには医者に着くじやろう。弥益医者なら朝早うても診てもらえるけえ、それまで……」

と祖父は言つて言葉を詰まらせた。それから

「ばあさん、神様と仏様へお灯明を上げて無事を祈ろうでよ」

と続けた。

お昼すぎ、元気がない父と母が足を引きずるようにして帰つて来た。母は玄関に入るなり泣き伏し

た。祖母は父の背中から妹をそつと抱き取り「どうじゃったか、どうじゃったか、えらかったのう」

と頭を撫でていた。祖父の目にも父の目にも涙が光っていた。

医者に行ったが間に合わなかった。行く道の途中に、妹は父の背中で息を引き取つたらしい。父はそれを感したが、医者に着くまで母には内緒にしておいたという。



生まれて百二十日余り、四か月の本当に短い間の生命であつた。

そのころの妹は、ほっぺをつつくと声を出して笑うようになっていた。右のほっぺには可愛いえくぼができた。唱歌

「わたしの人形はよい人形、

目はぱっちり、色白で、

小さい口元あいらしい……」

の人形の歌のようであつた。近所のおばさんたちも「まあ、かいらしいのんだ、隆ちゃんは娘盛りには、

さぞ別嬪さんになってじやろう」

と口を揃えて言つていた。それを聞くと、お姉ちゃん

の私は少しすねたりもした。

北枕に寝かした妹は薄桃色のネルの着物を着ていたが、顔に白い布が掛けてあつた。

おばさんたちが、旅立ちの衣を縫ってくれる。あの世への旅立衣は、晒し木綿と決まっていたが、母の願いで温かい白ネル地してくれた。

一針、一針、通夜の夜が更けて、お別れの時が近づいた。